

絵本を用いた音楽表現活動 —専門演習Ⅰ・Ⅱにおける学生の実践活動報告から vol. 1—

柚木たまみ*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Activity of Music Expression as Utilizing Picture Book

Tamami YUNOKI¹⁾

1) Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：幼児教育における活動は、五領域のうち単一の領域の中で成り立つのではなく他領域と時空間を共有して実施される活動である。言い換えれば、一つの活動はいくつかの目的を同包し、複層をなしている。ここでは、保育者を目指す学生が専門演習Ⅰ・Ⅱの授業の中で取り組んだ、楽器による音楽表現と絵本の読み聞かせを組み合わせた実践活動を報告する。また、この「表現」と「言葉」の複層領域の活動が子どもの音感受教育に生かされた例として考察をする。

キーワード：音楽表現、音感受、創造性、保育者養成、幼児教育

1. はじめに

本学幼児教育保育学科には2年次に専門演習Ⅰ、Ⅱという演習科目が設置されている。この科目は、学科の専任教員がそれぞれの専門性を活かした内容を通して、少人数のゼミ形式で時代と社会のニーズに応え得る幼児教育・保育の理解を深め、社会的責任を自覚していくものである。筆者は音楽を専門とするところから、「子どもの音楽遊びの理解と実践」をテーマとして授業を構成・実施した。なお、この年度の筆者の専門演習クラスは10名であった。

2. 実践内容について

筆者は最初にいくつかの音楽表現としての活動サンプルを学生に提示し、その中からどの活動を実践するかを学生に選択させた。学生が選択した活動のうちの一つが、この「絵本に音付けをする活動」であった。他の活動についてはまた別の機会に述べる。

学生によって選択された「絵本に音付けをする活動」は、概ね、①題材の選定・設定②音についての試行、キャストイング③練習・発表準備④附属幼稚園での発表⑤振り返りという流れで実施し

* E-mail: t-yunoki@sumire.ac.jp

た。以下に経過を記す。

2.1 題材の選定・設定

学内図書館に赴き、絵本のリサーチと選定を行なった。学生は「どうぞのいす」を題材として選んだ。通常の大きさの絵本と大型絵本(1ページの大きさ 50×45cm)があり、発表用に大型絵本を使用することとした。「どうぞのいす」の他に、挿絵の美しさやストーリーの面白さに魅かれた絵本作品がいくつかあったが、今回の目的である「音を付ける」「音楽を付ける」という作業を自ら行なうことを念頭において選考をした結果、学生全員一致で題材は決定した。

これまでに教育実習、保育所実習といった学外実習等で「どうぞのいす」を読み聞かせに使用したことのある学生もあったが、あらためて全員で通し読みを行い、ストーリーの流れを共有して見直しをつけた。

2.2 音についての試行, キャスティング

共有したストーリーを頭に描きながら、使用楽器のリサーチと選定を行なった。どの部分にどんな音を入れるか、そのためにはどの楽器を使用するのか、ストーリーに登場する動物の動作や状況等をどんな音で表すか、状況にはどこまで音を入れこむか等のディスカッションに、多くの時間を費やした。筆者は様々な楽器の提示や奏法のヴァリエーションについて示すことはあったが、使用する楽器と奏法の決定権は学生に委ねた。

リサーチの結果、最終的に使用する楽器は、ウッドブロック、ウインドパーチャイム、ギャロップカスタネット、ザイロフォン高音と低音計2台、フロアタム、サウンドブロック(音積み木)、タンブリン、カスタネット、バードコール、キッズスライドホイッスル、アコーディオン、クラリネット、トランペットと決定した。

絵本を読む役が2名で、1名はナレーター役、もう1名は登場する動物たちのセリフ部分を担当することとした。他の学生は楽器演奏による音作り役となった。

学生の中には吹奏楽経験者が少なくない。また、鍵盤楽器の演奏を得意とする学生もいる。この機に学内楽器庫にクラリネットとトランペット、アコーディオンを発見した学生がこれらの楽器演奏導入を望んだ。筆者は今回の音作りに関してはオリジナル性を重要視し、既成曲を使用することを原則避けようと考えていたが、他の学生たちもともに相談した結果、筆者が既成曲をアコーディオン、クラリネット、トランペット用に編曲したものをオープニングとエンディングに演奏することとした。使用した編曲譜を図1、図2に示す。楽曲のオリジナルはモーツァルト作曲ピアノソナタ第11番K. 331 第1楽章の第1主題である。

2.3 練習・発表準備

絵本を読み進める2名およびそれぞれの小物楽器演奏者には、特別な高度な技術・技能は必要ではない。しかし、絵本を読む速度、声の大きさと高さ、ニュアンス(声色)の付け方、間の開け方、視線と表情の方向等については、提案として指導をしていった。楽器演奏に関しても、タイミングと音入れの長さ、音の大きさと奏法の選定等について、いくつかの方法を提示しながら相談の上学生が決定するように指導を進めていった。絵本の読み方や楽器それぞれの奏法等がほぼ決定し全体の流れが確定すると、学生間で客観的に修正意見が出されるようになり、アンサンブル作品としてまとまっていくようになった。

台本は、絵本内の文言は一切変えずにそのままの文章を用いて作成した。台本を表1として示す。また、学生が作成した楽器配置を図3に示す。

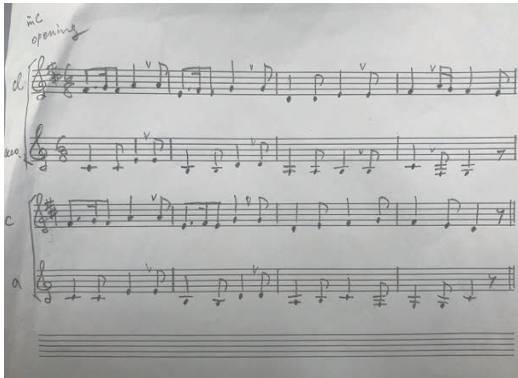


図1 オープニング二重奏

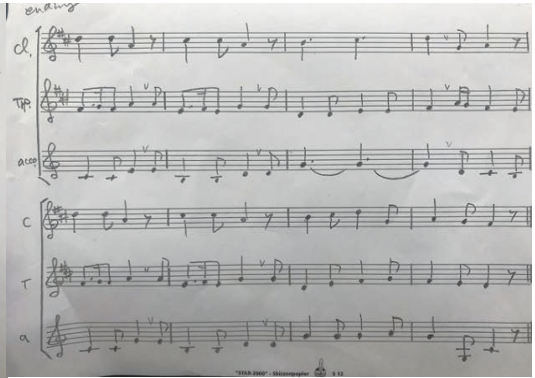


図2 エンディング三重奏

表1 「どうぞのいす」(作/香山美子) 活動の台本

ページ	文 章	使用楽器	演奏方法等
	(オープニング)	クラリネット アコーディオン	二重奏(※既成曲編曲版)(図2)
p.2~3	うさぎさんが ちいさな いすを つくりました。 うさぎがつくった しるしに いすに みじかい しっぽを つけました。	ウッドブロック ウィンドパーチャイム バードコール	カン、コン、カン、コン グリッサンド(低音→高音、速く) 小鳥のさえずり

絵本を用いた音楽表現活動

p.4-5	「さて、この いす、 どこへ おこうかな。」 ちよっと かんがえると たちまち いい かんがえが うかびました。 うさぎさんは たてふだを ひとつ つくりました。	サウンドブロック バードコール	G音1回(ひらめき！)
p.6-7	(文章なし)	バードコール	小島のさえずり
p.8-9	はじめに やってきたのは ろばさんでした。 どうぞの いすを みると いいました。 「おや なんて しんせつな いすだろう。」	ギャロップカスタネット バードコール	パコッパコッ パコッパコッ
p.10-11	ろばさんは どんぐりを いっぱい ひろって いえに かえるところ でしたからね。 すわる かわりに かごを いすに おきました。	ザイロフォン (低)	C、G 上行 (よっこらしょ)
p.12-13	つかれていたから いい きもち。 せなかが かるくなったから いい きもち。 おおきな きのはは いい きもち。 それで ろばさんは つい おひるね。	バードコール クラリネット	C～ G～ C～ G～(寝息)
p.14-15	そこへ くまさんが やってきました。 いすを みると いいました。 「これは ごちそうさま。 どうぞならば えんりよなく いただきますよう。」	フロアタム フロアタム	ドーン、ドーン、ドーン ドーン、ドーン
p.16-17	くまさんは かごの なかの どんぐりを みんな たべて しまいました。 「でも からっぽに してしまつては あとの ひとに おきのどく。」	ウッドブロック	カポッ
P18-19	そこで かわりに はちみつの びんを かごに 入れて いきました。		

柚木 た ま み

	そんな ことは しらない ろばさんは くう くう おひるね。	サウンドブロック クラリネット	F, A C~ G~ C~ G~
p.20-21	くまさんの つぎには きつねさんが やってきました。 やきたての パンを もってきました。	ザイロフォン(低)	CDEFG,G,AFCAG(「こぎつね」の冒頭メロディ)
p.22-23	どうぞの いすを みると いいました。 「まあ ごちそうさま。 どうぞならば えんりよなく いただきますよ。」	ザイロフォン(低)	CDEFG
p.24-25	きつねさんは はちみつを みんな なめて しまいました。 「でも からっぽに してしまつては あとの ひとに おきのどく。」	サウンドブロック	BCBC(速く)
p.26-27	そこで かわりに やきたての パンを いっぱい かごに いれて いきました。 そんな ことは しらない ろばさんは まだ おひるね。	タンブリン クラリネット	リムグリッサンド, パンパン C~ G~ C~ G~
p.28-29	きつねさんの つぎには じっぴきの りすさんが やってきまし た。 くりを いっぱい ひろって もっていました。	カスタネット ザイロフォン(高) バードコール	タタタタ, タタタタ コロコロ, コロコロ(ランダム音)
p.30-31	どうぞの いすを みると いいました。 「ぼくたち くりは ひろいながら たべたけど パンは まだ たべてない。 どうぞならば いたごう。」	カスタネット ザイロフォン(高)	タタタタ, タタタタ コロコロ, コロコロ(ランダム音)

絵本を用いた音楽表現活動

<p>p.32-33</p>	<p>じっぴきの りすさんは たちまち パンを たべて しまいました。 「でも からっぽに してしまっは あとの ひとに おきのどく。」</p>	<p>カスタネット ザイロフォン(高)</p>	<p>タタタタ、タタタタ コロコロ、コロコロ(ランダム音)</p>
<p>p.34-35</p>	<p>そこで かわりに くりを いっぱい かごに いれて きました。 「うー ふわあー。」 ろばさんが めを さました。</p>	<p>カスタネット ザイロフォン(高) ウインドパーチャイム</p>	<p>タタタタ、タタタタ コロコロ、コロコロ(ランダム音) グリッサンド(低→高、ゆっくり)</p>
<p>p.36-37</p>	<p>「あ、あ、すこし やすみすぎたかな。」 そう いって めを こすりこすり かごを のぞいた ろばさんは いいました。 「あれえ……。」</p>	<p>ギャロップカスタネット ギャロップカスタネット スライドホイッスル</p>	<p>パコッ パコッ パコッ ヒューーウッ</p>
<p>p.38-39</p>	<p>「あれれれえ。 どんぐりって くりの あかちゃんだった かしら。」 まさか! ろばさんの おひるねが すこし ながすぎたんでしょね。</p>		
	<p>(エンディング)</p>	<p>トランペット クラリネット アコーディオン</p>	<p>三重奏(※既成曲編曲版)(図3)</p>

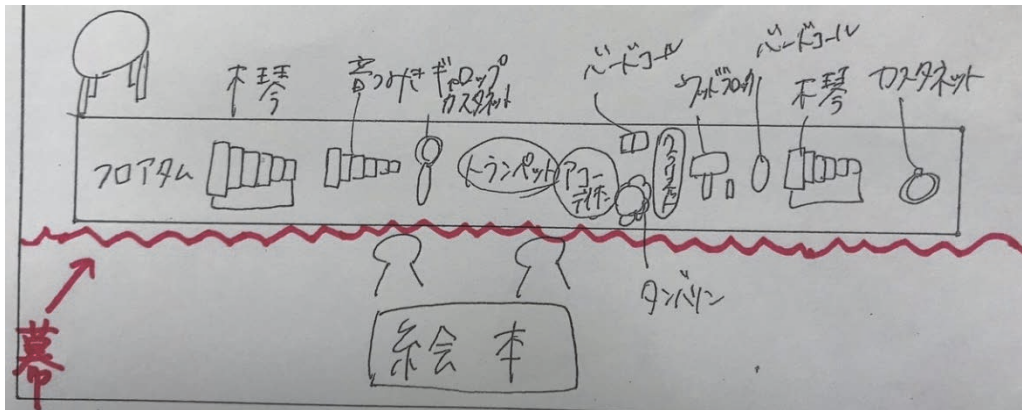


図3 楽器等の配置

附属幼稚園での発表日が近づき、園長先生にご挨拶をする機会を持つことができた。その際に、発表を行う会場の下見をさせていただいた。幼稚園園舎内の中心にある広い遊戯室の舞台を使用できることが確認できた。

舞台には可動式の幕があり、この幕を利用した配置を考えることとなった。絵本の話が進行している間は園児が話に集中できるように、楽器は幕の後ろ(舞台後部)に隠して配置し、楽器を見せずに音だけが聞こえるようにすることにした。絵本の読み手はマイクを使用することとした。

会場下見を経て、実施空間のイメージができたと同時に、130名余の園児の前で発表をするという実感が湧き、発表当日のプログラミングもスムーズに行われた。絵本の読み手2人を進行役に、<導入>手遊び「はじまるよ」<メイン活動>「どうぞのいす」<ふりかえり>楽器紹介 という流れが決定した。発表時の服装は、園児が絵本と楽器の音に集中できるように、上下を白黒に統一することもとりまとめられた。

3. 結果と考察

3.1 学生の活動振り返りレポートより

発表終了後、学生に、子どもたちの表情や言動を中心に観察レポートを提出してもらった。表2にその内容を5つの項目に分けてまとめる。

絵本を用いた音楽表現活動

表2 学生の振り返りレポートによる子どもの様子と感想

準備時	大きな絵本を見つめて興味を持っていた。
導入(手遊び)	期待を高めたと思う。 自分たちの歌と動作をととてもよく見ていた。 楽しそうにしていたが動作は曖昧だった。自分たちの歌や動作をもっとしっかりすればよかったのではと思う。
絵本の読み聞かせ	<u>オープニング音楽が流れると、絵本に注目してワクワクしている姿が多く見られた。</u> お話が始まると表情は皆真剣になり、興味津々だった。 登場する動物名を口にしたり、聞こえてきた音をオノマトペで表現したりしていた。 最初は静かだったが、だんだん色々な音に反応して何の楽器の音か想像して「〇〇の音や」と口にする様子があった。 聞こえてくる <u>楽器の音に集中して耳を傾けていた。</u> 音に反応して「〇〇や」「△△みたい」など発言が多くあり、イメージができていな、と思った。
絵本の読み聞かせ終了後幕が開いた時	「 <u>こんな楽器使ってたんだ</u> 」「あれ知ってる」という発言や、音を模倣する行動があったり、「 <u>どっから音が鳴ってんの?</u> 」と口にする子どももいた。
楽器紹介	絵本の <u>場面を思い出しながら、楽器の名前を口にしていた。</u> 楽器の名前を聞いて、楽器を見ながら音を目をキラキラさせて聞いていた。 <u>どの動物の時に鳴っていたかの問いに、次々と声を上げて答えてくれる姿を見て、ちゃんと聞いてくれていた</u> と思い、同時にやってよかったと思った。 <u>絵本のお話のどの部分で使われていたのかを子ども同士で話していた。</u> 「知ってる」「たいこ」「くまさん(の音)」と発言による反応が多くあった。
活動終了後	<u>楽器を手にして触る行動が見られた。</u> 「 <u>その楽器知ってる</u> 」「 <u>あれは初めて見た</u> 」等反応していた。 帰る時にハイタッチをしながら笑顔で「おもしろかった」と言ってくれた。楽しんでくれたんだな、と思い安心した。 自発的に「ありがとう」と言ってくる子どももいたので、やってよかったな、と思った。 多くの子どもがハイタッチをしに来たり「ありがとう」と言ってきた。 片付けをして帰る時にも、「これ知ってる」「どう鳴らすん?」と楽器に関心を示してきた。 活動終了後も「さよなら」と言いにくたり、ハイタッチをする子どもが多くいた。「これがクラリネット?」「僕のお姉ちゃん、持ってるよ」と言ってくる子どももいた。

<p>その他感想等</p>	<p>幕で隔てられていたので、どうしたら楽器の音を「よく」伝えることができるか考えて鳴らした。</p> <p>お話中は音だけの想像だったが、終了後の楽器紹介でどの楽器の音かがわかり、この楽器からこんな音が出るんだということが知ってもらえたのが良かったと思う。</p> <p>「もう一回見たい」という子どももあり、嬉しかった。</p> <p>鳴らしてみたい、もっと触ってみたい、と思う気持ちが膨らんだのではないかと思う。</p> <p>どの年齢の子どもたちにもフィットする活動ができたと感じる。</p> <p>様々な楽器の音の音に反応していたので、次の活動での子どもたちの活動での反応も楽しめてもらえそうだったと思った。</p> <p>このことを次の活動につなげたい。</p> <p>やってよかったな、と思えた。</p> <p>次の活動につながるなと思った。</p>
---------------	--

3.2 考察

学生によるレポートから園児の反応をみると、絵本の絵とストーリーに集中しながら、楽器演奏による音についても絵とストーリー内容に関連しているということを同時に感じ取っていたことがわかる。見えない楽器の音を聞いてオノマトペで言語表出したり、楽器紹介時に「こんな楽器使ってたんだ」という発言があったり、また、どの動物のテーマに使用されていたかを記憶していたことがその例として挙げられる。

絵本の選定はどうだっただろうか。「どうぞのいす」は「言葉」の量が多すぎず、ストーリーがシンプルでありながら、バラエティに富み、かつ親しみやすい動物キャストが登場する。3歳児から5歳児までの異年齢集団における実践発表には、理解難易度が高くなく、非常に適していたと考える。

使用した楽器については、原則的に高い演奏技術が不要な楽器を使用した。園児が普通の保育の中で手にしたことがあろう楽器も含まれていた。反面、前述のアコーディオン、クラリネット、トランペットは、おそらく園生活においては初めて見る楽器であったであろう。舞台の幕の利用は、音色の違い、音の大きさの違い、楽器ごとの様々な奏法を、聴覚のみで捉える場を作った。「何の音だろう」という“ときめき”と、幕が開いて楽器を視覚で捉え、自分の予測や思い描いたイメージと重ねた時の「何ていう楽器なんだろう」「どうやって鳴らすんだろう」「鳴らしてみたい」というさらなる“ときめき”の膨らみを生み出した。子どもたちは、五感を通して感じ取った情報から心に芽生えた小さな感動を様々な言葉で表出、表現し、子ども同士や学生とコミュニケーションしていた。

「言葉」領域の教材である絵本「どうぞのいす」のストーリーと「表現」、音楽表現領域の教材である楽器が自然なかたちでコラボレートされ、子供たちに抵抗なく受け容れてもらうことができた

活動であった。

3.3 今後の課題

学生は、絵本の「読み」を邪魔することなく音による登場キャストのテーマモチーフを考え、繰り返しやバリエーションについても工夫を凝らし、心情や状況を表すことにも楽器を使用できる可能性を追究することができた。そして、今回の活動の意図として、単なるBGMとしての音楽の使い方ではなく、その状況にふさわしい音を自分で考えて創り出すおもしろさを感じ取り楽しんでくれた。学生たちは、最初、絵本と音のコラボの活動と聞いて、ストーリーを歌にするのか、それは難しい、というイメージを抱いたようである。しかし、そうではないことに気づくと、積極的に楽器の選定や奏法に関してアイデアを出せるようになっていった。楽譜がなくても成り立つ音楽として、近い将来自分たちが行う保育の中に導入し、大いに役立ててくれることを願う。

保育における音楽の導入が、このように、「音楽表現の活動」として独立・区別した領域として捉えられるのではなく、むしろ、他領域の中に自然に入り込み、その領域のねらいが達成できることを助長するものが音楽ではないかと考える。安易でありながら効果的な音、音楽の導入・利用ができるよう、様々なアイデアを具体的に提案していきたい。

4. おわりに

学生がレポートで「次の活動」と記しているのは、専門演習の活動として提示した中から選んだもうひとつの実践活動のことである。楽器を違う方法で使用する活動であるが、今回報告した活動後に「つながる」と感じ、意識できていたことが非常に驚きであり嬉しくもあり、学生の成長だと感じた。

今回の活動では、子どもたちに多くの“ときめき”を心に芽生えさせることができた。「次の活動」は、子どもたちが主体的に音を作り出す活動である。数多くの“ひらめき”が花咲くことは、間違いのないであろう。Vol.2において、実践報告をする予定である。

謝辞

本件執筆にあたり、滋賀短期大学附属幼稚園では私たちの活動にご理解をいただき多くの時間と実践の場を与えてくださいました。拙い実践を快く受け容れてくださり、温かなまなざしで応援してくださった附属幼稚園の小野清司園長をはじめ、先生の皆様に心から御礼を申し上げます。

文献

- 1) 平成29年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領<原本>
チャイルド本社 2017
- 2) モーツァルトソナタアルバム2 全音楽譜出版社出版部編

柚 木 た ま み

- 3) 無藤隆 吉永早苗 子どもの音感受の世界-心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求- 萌文書林
2016
- 4) 田島信元 佐々木丈夫 板橋利枝 早川史郎 黒石純子 春日文 牛山剛 藤本朝巳 歌と絵本が育む子どもの豊かな心 -歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ- ミネルヴァ書房 2018